

# 現代のことは

こはら  
小原 かつひろ  
克博



アメリカ大統領選挙直前の一週間、学会に参加するため、シカゴに滞在した。仕事の関係で選挙当日の十一月四日に帰国しなければならなかったが、選挙直前と当日の緊張と興奮の一端を感じ取ることができた。

過去二回の選挙は僅差で勝敗が決した接戦であり、今回も、両陣営とも最後まで精力的に選挙活動を行っていた。選挙直前には、マケイン陣営から強烈なオバマ批判のテレビ・コマーシャルが流された。それは、オバマ氏が二十年以上通っていた教

会のライト元牧師のアメリカ批判の映像であり、そのような過激な黒人指導者を師と仰いできたオバマ候補に票を投じるべきであろうか、というメッセージであった。

キング牧師が公民権運動を指

導していた一九六〇年代においても、黒人と白人の対等な地位を求める穏健な立場と、白人中心のアメリカ社会を糾弾する急進的な立場とが併存していた。もちろん、オバマ氏は前者の伝統を継承しているが、マケイン陣営は、オバマ氏を後者のイメ

## 見える未来と見えない過去 アメリカの大統領選挙

ージに重ね合わせて、白人有権者に最後の揺さぶりをかけたのであった。

黒人（アフリカン・アメリカン）の大統領が誕生するということは、奴隷解放の父リンカーンそしてキング牧師すら当時想像できなかったに違いない。アメリカ社会における人種差別の根は深い。しかし、今回の選挙結果は、アメリカが各種の差別や価値観の違いを乗り越えていく上で大きな一歩になったように思う。

選挙当日の早朝、シカゴの街中で長蛇の列を目の当たりにした。最初、それが何の列であるかわからなかった。しかし、テレビを通じて、全米で同様の光景があることを知った。場所によっては五、六時間も待たされ、それでも一票を投じようとする

有権者の列である。今回の選挙では、特に若者を中心とする新たな投票者や選挙ボランティアが増えたことも特徴的であった。若い世代が国造りに積極的に参加し、自分たちの将来を一票に託そうとする。政治制度が異なるとはいえ、今回の大統領選挙を対岸の出来事として眺めるだけでは、もつたいないのではないか。

十数時間前まで自分がいたシカゴで行われたオバマ氏の勝利演説を、帰国してからインターネットで、じっくりと聞いた。イエス・ウィ・キャン（我々にはできる）というオバマ氏の合言葉が、この演説でも七回繰り返されていた。その言葉が単なる楽観主義ではなく、アメリカの精神的源流に由来するものであることを明瞭に感じた。アメ

リカ建国の父たちの夢、リンカーンがもたらした解放と和解、公民権運動の精神が今なお生きていることをオバマ氏は力強く語っていた。

これらの精神的起源は、単なる歴史的過去というより、異なる背景を持った人々を結束させる神話の起源とも言うべき性格を持つている。立ち返ることによって建国の理想・理念を再活性化させる、この強力な再生神話こそが、アメリカの強さの源にある。かつて夢想すらできなかった黒人大統領の誕生という新しい神話が、人種差別をはじめとするさまざまな隔ての壁を乗り越えていく、歴史的一步となることを願わざるを得ない。

（同志社大教授・キリスト教思想）